

平成 23 年度「学力向上のための P D C A サイクルづくり支援事業」
C 調査分析結果について

教 学 指 導 課

1 調査教科及び調査した児童生徒数

() 内は参加校数

	国語	算数・数学	英語
小学校 5 年	14,748 人 (295 校)	14,089 人 (285 校)	
中学校 2 年	13,981 人 (141 校)	13,801 人 (140 校)	13,915 人 (140 校)

(参考：全県 小学校 20,525 人, 382 校, 中学校 20,659 人, 187 校)

過去の参加状況

		国語	算数・数学	英語
平成 21 年度 C 調査	小学校 5 年	11,095 人 (239 校)	11,456 人 (240 校)	
	中学校 2 年	7,689 人 (98 校)	7,679 人 (98 校)	7,733 人 (99 校)
平成 22 年度 C 調査	小学校 5 年	14,545 人 (284 校)	14,541 人 (284 校)	
	中学校 2 年	11,367 人 (118 校)	11,525 人 (119 校)	11,393 人 (118 校)

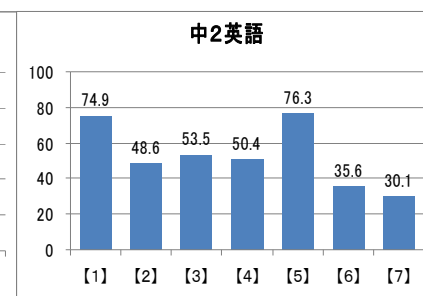
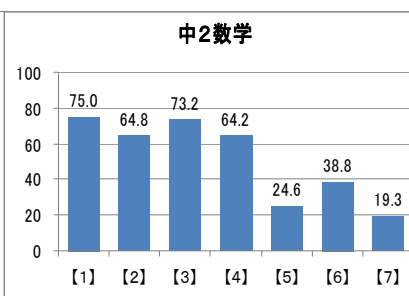
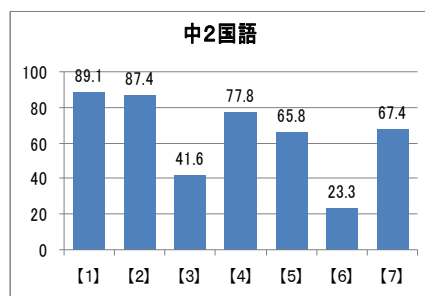
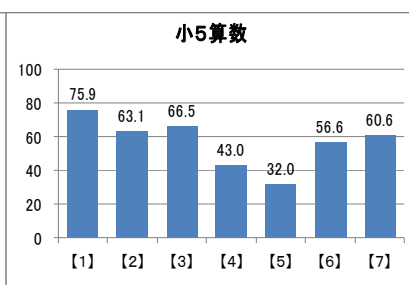
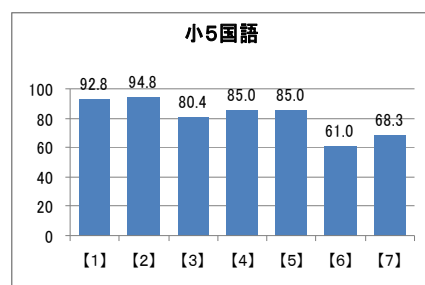
C 調査参加校数の経年変化

	参加校	参加率
平成 21 年度	339 校	58.7%
平成 22 年度	403 校	70.5%
平成 23 年度	436 校	76.6%

2 各問の正答率

(単位%)

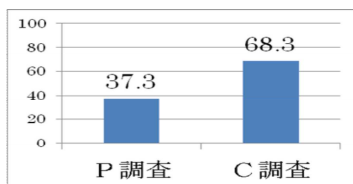
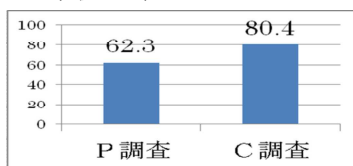
問題番号		【1】	【2】	【3】	【4】	【5】	【6】	【7】	全体
小学校 5 年	国語	92.8	94.8	80.4	85.0	85.0	61.0	68.3	81.1
	算数	75.9	63.1	66.5	43.0	32.0	56.6	60.6	56.8
中学校 2 年	国語	89.1	87.4	41.6	77.8	65.8	23.3	67.4	64.6
	数学	75.0	64.8	73.2	64.2	24.6	38.8	19.3	51.4
	英語	74.9	48.6	53.5	50.4	76.3	35.6	30.1	52.8



◇成果と◆課題の概要

(1) 国語

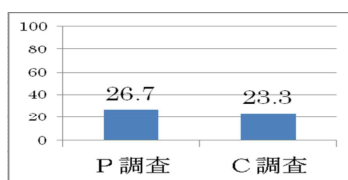
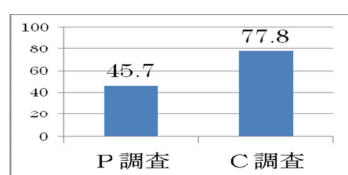
<小学校 5 年>



◇二文を一文に書き直す【3】はP調査より 18.1 ポイント上回った。相手に分かりやすく伝えるために文の構成を工夫する学習の機会を多くするなど、指導改善の様子が伺える。

◇【7】は主張のために必要な情報を読み取って書き抜く問題で、P調査より 31 ポイント上回った。各領域で目的に応じて根拠を挙げて筋道を立て、内容を明確にしていく学習の成果が見られる。

<中学校 2 年>

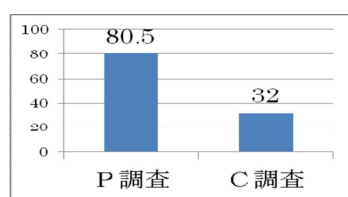
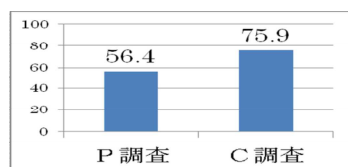


◇歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直す【4】は、P調査より 32.1 ポイント上回った。音読等を通して古典特有の仮名遣いの特徴や語のまとまりについての理解を促す指導に成果が見られる。

◆示された視点で資料を対応させて読み、理由付けにつながる事実を選び出して記述する【6】は、P調査類題よりも 3.4 ポイント下回り、継続して課題である。根拠を明確にして自分の考えを書き、そのまとめた考えを交流し合う学習場面をさらに増やすことが必要である。

(2) 算数・数学

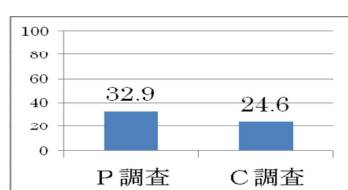
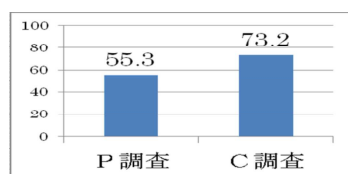
<小学校 5 年>



◇【1】の小数の加法はP調査より 19.5 ポイント上回った。数直線上で小数の位置や大きさを確かめる等、意味を理解し、計算の仕方を考える指導に成果が見られる。今後も意味理解を伴う指導を積み重ねたい。

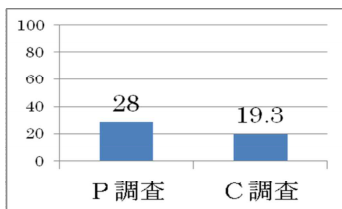
◆【5】(式 $6 \div 12$, 答 0.5 倍) は、何倍かを求める場合の除法の意味についての理解を確認する問題で、P調査(式 $12 \div 3$, 答 4 倍)より 48.5 ポイント下回った。「何倍」と聞かれると整数倍と考えて、 $12 \div 6$ をつくる誤答が多く見られた。数直線や線分図に数量を表して、基準量と比較量が何かをはっきりさせ、 $6 \div 12 = 0.5$ を導き出していく学習活動が必要である。

<中学校 2 年>

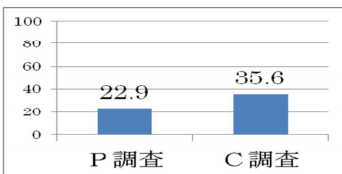
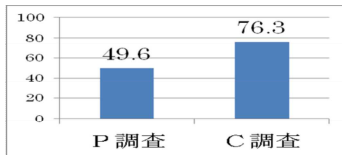


◇比例のグラフをかく【3】は、P調査より 17.9 ポイント上回った。表、式、グラフを関連付けながら関数の特徴を見いだしていく数学的活動を位置付けてきたことに成果が見られる。

◆見取図のない回転体の体積を求める【5】は、見取図のあったP調査よりも 8.3 ポイント下回った。直角三角形の1辺を軸に回転させたときの図形を円錐ととらえられないことが原因と考えられる。空間図形を実際につくりながら実感的に学んだり、「計算の過程」と「面が立体を構成する様子」とを関連付けてとらえさせたりするなどの工夫が必要である。



(3) 英語



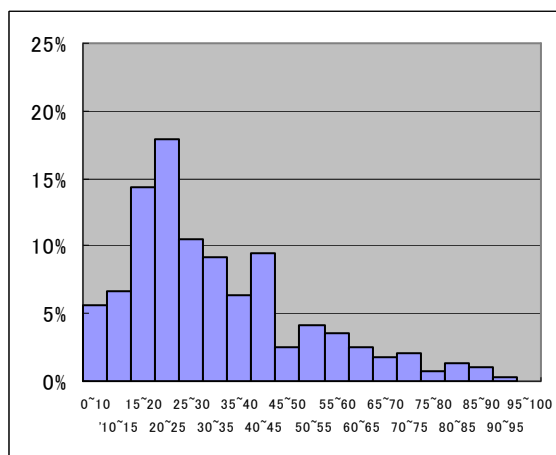
◆奇数と偶数の和が奇数になることを説明する【7】は、8.7ポイント下回った。文字式を用いて説明することに抵抗を感じている生徒が多い実態が読み取れる。 $2(m+n)+1$ と文字式を表したり、目的に応じて変形したりすることにとどまらず、式の意味を読み取り、それをもとに説明したり伝え合ったりする学習活動が必要である。

◇Yes-No 疑問文【5】はP調査より26.7ポイント上回った。主語を正確に見付け、代名詞で答える指導に成果が見られる。

◆wh-疑問文【6】はP調査より12.7ポイント上回ったが、40%を下回る正答率からして引き続き課題である。指定された語数や正しい語順で答えることができなかった。[主語+動詞]の語順を意識させて正しく答えることや、書いて文法の正しさを確認するような指導が必要である。

○学校による正答率の分布に特徴がある問題について（学校ごとの正答率の分布より）

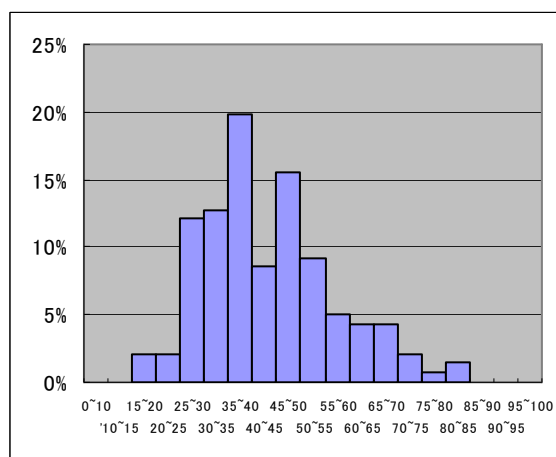
<小学校5年算数【5】> 正答率32.0%



「青色のテープの長さは6m、黄色のテープの長さは12mです。青色のテープの長さは、黄色のテープの長さの何倍ですか。式と答えを書きなさい。」

学校ごとの正答率は0%台～95%まで広い範囲でちらばっている。学習指導に当たっては、誤答の「 $12 \div 6$ 」を生かして、何が基準量で、何が比較量なのかをとらえる場面を仕組み、式が「 $12 \div 6$ 」になるのはどんな場合なのかや、どんな問題になるのかに着目させ、児童一人一人が表現する活動を取り入れたい。このように意味をとらえる活動を通して、基準量と比較量が何かをはっきりとさせる指導改善を進めていきたい。

<中学校2年国語【3】> 正答率41.6%

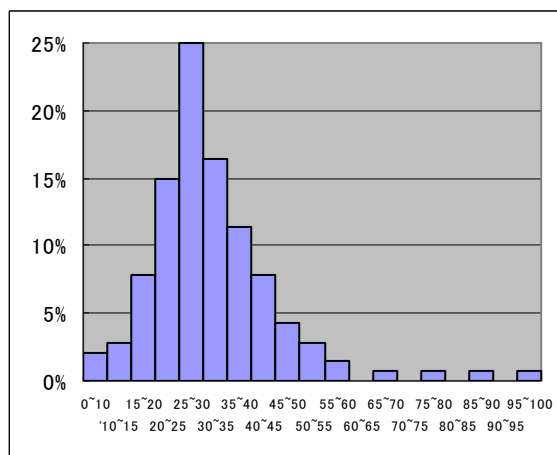


主語・述語の対応関係が正しくない一文を、2つの文に適切に分けて表現しなさい。

「わたしたちは、校内駅伝大会優勝をめざし、毎日の練習に取り組んでいて、クラス全員の大きな目標です。」

学校ごとの正答率が15～85%の範囲でちらばっており、平均値の階級の割合が低く、2こぶ状態となっている。文章の推敲の学習過程で、単に文章を修正するだけでなく、なぜ修正するのかという理由を明確に意識しながら、自分で読み返したり、グループで読み合ったりする学習活動につなげていきたい。

< 中学校 2 年英語【7】 > 正答率 30.1%



あなたが先週したことを 1 つ取り上げ英語で 1 文書き、そのことについてのあなたの考えや気持ちをさらに英文で 1 文書き加えなさい。

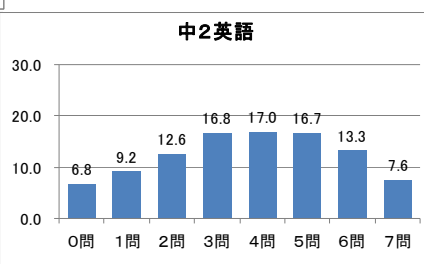
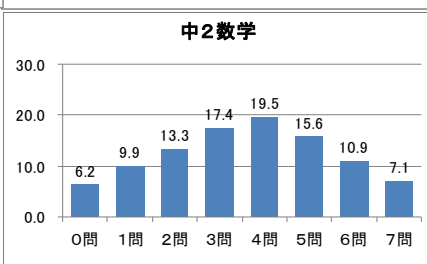
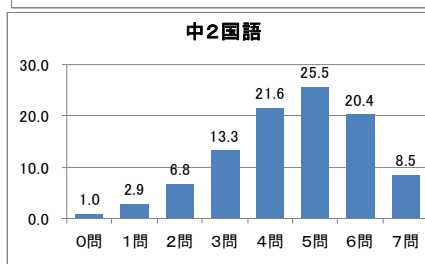
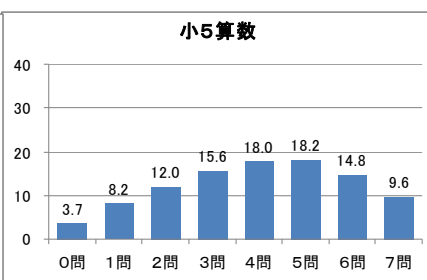
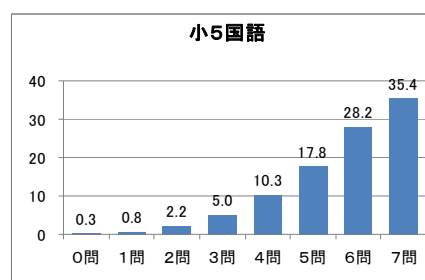
例：I played tennis. I like it very much.

学校ごとの正答率が平均値よりも低い階級にピークがあり、40%を超える正答率は約 2 割となっている。書くことへの抵抗感を少なくするような場面設定の工夫や、文法や綴りなどの文の正確さに着目させながら、正しい文を書く指導の充実を図りたい。

3 正答数の分布

(単位%)

正解数		0 問	1 問	2 問	3 問	4 問	5 問	6 問	全問
小学校 5 年	国語	0.3	0.8	2.2	5.0	10.3	17.8	28.2	35.4
	算数	3.7	8.2	12.0	15.6	18.0	18.2	14.8	9.6
中学校 2 年	国語	1.0	2.9	6.8	13.3	21.6	25.5	20.4	8.5
	数学	6.2	9.9	13.3	17.4	19.5	15.6	10.9	7.1
	英語	6.8	9.2	12.6	16.8	17.0	16.7	13.3	7.6



小学校国語では右寄り、小学校算数と中学校国語がやや右寄りの分布となった。また、中学校数学と英語では、ほぼ左右対称の分布となった。P 調査と比べ右寄りになったのは国語の漢字や算数・数学の数の計算や関数のグラフなどについて各校の取組で定着が進んでいることが影響したと考えられる。

正答数が 0 問の児童・生徒の割合が、P 調査結果と比べると、小学校国語では 3.3%→0.3%、小学校算数では 4.1%→3.7%、中学校国語では、26.9%→1.0%、中学校数学では、9.2%→6.2%、中学校英語では、11.9%→6.8%とどの教科も減っている。P 調査の分析から課題意識をもった学校が、指導改善の取組をしている成果が出てきていると考えられる。

各学校では、問題ごとの正答率や教科ごとの正答数について、県から配付された分析シートに自校のデータを入力することで、県の分布と自校の分布を比較して検証し、対応策を考えていきたい。

4 家庭学習の時間

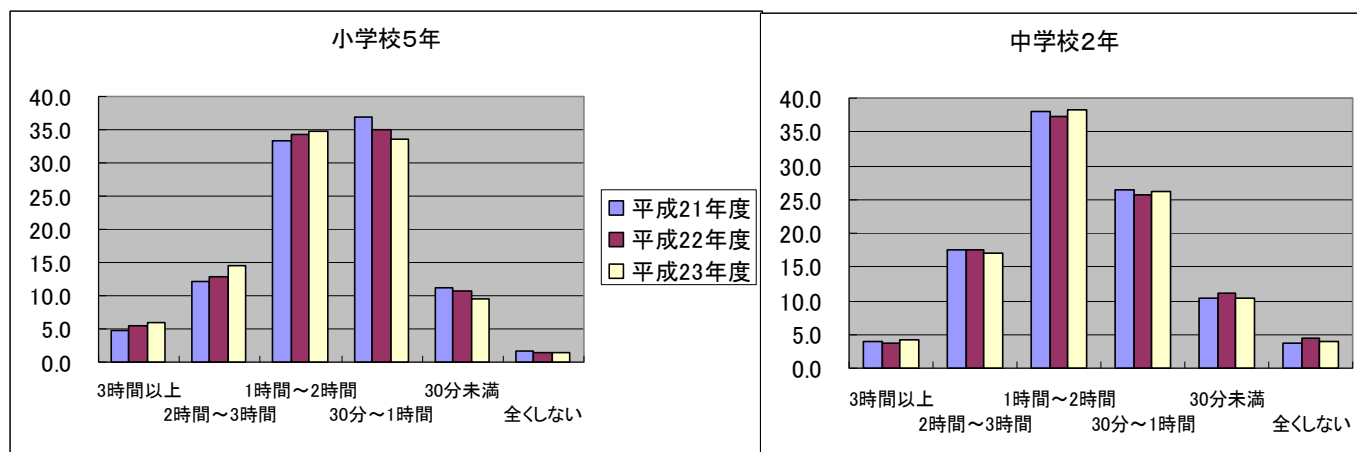
◇学校の授業時間以外に、ふだん（月曜日から金曜日）、1日あたりどれくらいの時間、勉強しますか。（学習塾で勉強している時間や家庭教師の先生に教わっている時間も含まれます。）

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 1 3時間以上 | 2 2時間以上, 3時間より少ない |
| 3 1時間以上, 2時間より少ない | 4 30分以上, 1時間より少ない |
| 5 30分より少ない | 6 全くしない |

（単位％）

選択肢	3時間以上	2時間～3時間	1時間～2時間	30分～1時間	30分未満	全くしない
小学校5年	6.0	14.6	34.8	33.7	9.5	1.5
中学校2年	4.1	17.1	38.1	26.2	10.3	4.1

＜平成21～23年度のC調査時の推移＞ （C調査：3年間とも11月第3週に実施）



小学校5年では、家庭学習時間が1時間以上である児童の割合が、21年度50.2%から、22年度52.8%、23年度55.4%と次第に増えている。これは、家庭学習の充実研修などを通して、見直しの機会をもったり、手引きを作成して活用したりするなど、家庭学習の充実に向けての動きが出ているものと読み取れる。

一方、中学校2年では、3年間の変化はあまりなく、1～2時間の家庭学習を行っている割合が最も高い。また、P調査結果と比べると、1時間以上の割合が63.3%→59.3%と4.0ポイント減少している。部活動や生徒会等により、学校外での学習時間の確保が難しいなどの実態も考えられ、生活時間の見直しをして、家庭学習ができるような時間的保障を模索するなど、学校としての課題意識をもって、各学校の実態に即した改善策を検討する必要がある。また、家庭学習の時間だけでなく、内容を充実させるために、より細かな実態調査を次回より行っていきたい。